

修飾のもと、いかなる外的な変化あるいは換骨奪胎が発生したかを説明することにある。方法論的にいえば、いわゆる「文化交流史」は、ある文化の流動と伝播を研究すべきであるのみならず、より研究すべきなのは、このような流動と伝播が、いかなる結果を生んだかである。したがって、私は伝統的な「文化交流史」を別の言い方に換えてみたい。すなわち「交錯の文化史」である。あわせて、不当に使用されがちな比喩をもって言い換えるならば、文化交流史は、文化の相互交流の過程つまり「恋愛」を研究するだけでなく、「結婚」したあとの「子供が生まれる」ことをもっと研究すべきである。すなわち、文化交流後、各地域における「受容」ののちの「変容」を考察することである。

補注

李燾『統資治通鑑長編』巻31、697-698頁によると、宋の太宗淳化元年(990)のこととして次のようにある。「戸部郎中の柴成務、兵部員外郎の趙化成に命じて高麗に使いせしむ。左正言の宋鎬、右の王世則をして交州に使いせしむ。加恩の制書を以て王治および黎桓に賜うるなり。高麗国の俗として、陰陽鬼神の事を信じ、頗る拘忌多く、朝廷の使いの至るごとに、治は必ず良月吉日を択び、方めて礼を具して詔を受く。成務は館にあること月を逾え、乃ち治に書を詣り、責めていわく「其の禁忌を牽き、小数に泥わり、日者の浮説に眩惑せられ、天子の命書を稽緩せり。惟れ典冊の垂文なれば、巫祝の能く曉るに非ず。『書』に上日を称するも、六甲の元辰を推さず、『礼』に仲冬を載するも、但だ一陽の嘉会を取るのみ。燦然たる古訓、以て明稽するに足る。宜しく凶を改め、速かに君賜を拝すべきところなり」と。治は書を見て慚く懼るも、霖雨の止まざるに会い、乃ち晴霽を俟つを請う。成務は復た書を詣りて開論するに、治は即ち出て拜命せり」。

付記：著者提供の原稿にもとづき、明らかな誤記や重複は改訂した。原文：中国語、訳者：土屋昌明

許筠の『東國名山洞天註解記』と道教文化史的意味

チョン・ミン (佐藤厚訳)

1. はじめに

『東國名山洞天註解記』という本の名前は、韓國精神文化研究院(現在の韓國学中央研究院)の蔵書閣に所蔵される『臥遊録』に初めて見られる。ここには号を眞實居士とした祥原郡の衙前である趙玄が正徳乙亥年(1515、中宗10)に書いた「東國名山洞天註解記序」と、僧侶の智光が嘉靖乙丑年(1565、明宗20)に書いた「題名山洞天誌解後」という文章が並んで記されている¹⁾。趙玄と僧侶智光の名前は他の文献で確認することができず、この本の存在も今まで全く知られていない。

その内容は、韓國の各地域に散在した、道教でいう神仙たちの居住地である洞天福地について詳しく紹介し、各洞天福地の俗名と位置、各處を司る眞人仙官の名前についてまとめたものである。現在、この本の實物は傳わらないが、『臥遊録』に掲載された2つの文章だけでも、この本の全體的な内容を理解するのに十分だ。この資料は朝鮮前期以降、独自の發展を模索してきた朝鮮道教の自主化努力が具體化された一つの明らかな證據となる。

この資料に興味を持っていたところ、論者は偶然、朝鮮後期の南克寬(1689-1714)の『夢嚙集』で、この本に関するもう一つの短い文章と出會った。「題東國名山洞天志」という文章であるが、ここには『東國名山洞天註解記』の著者を許筠(1569-1618)と明確に示し、この本は許筠の偽作であり、前述の趙玄と僧侶智光も彼が作り出した架空の人物であるという内容が記されている。

南克寬のこの言葉を信頼すれば、私たちは相次いで起こる疑問に遭遇する。許筠はなぜこの本を書いたのか。書いた後はどうして自分を隠し、架空の人物を動員してもっともらしい神秘的な色彩を被せて一般に流布させたのか。宣祖代を前後して流行する神仙傳説、ひいては道教文化の擴散と關連付けて、この本はどのような示唆を與えるのか。『朝鮮王朝實錄』における彼の謀反事件に關連して言及されている『山水秘記』と、この本は何の關係もないのだろうか。南克寬はまた、どのような根據で本書の著者を許筠と斷定できたのか。このような疑問が次々と提起されるが、本稿はまさにこのような疑問に対する解答を探す過程になるであろう。

*本論文は韓國の漢陽大學校教授チョン・ミン(정민)氏の論文「許筠의『東國名山洞天註解記』와 도교문화사적 의미」(『道教文化研究』、韓國道教文化學會、2000年4月) pp.37-70の日本語訳である。翻譯を許可していただきましたチョン・ミン先生に感謝申し上げます。

注1…『臥遊録』は韓國精神文化研究院から韓國學資料叢書11として1997年に影印刊行され、前にはイ・ジョンムク教授の解題が載っている。解題でイ教授は、この資料を道家系列の山水遊記資料として特別に注目し、本論文を書くことになったきっかけを作ってくれた。

『東國名山洞天註解記』は現時点では實物が伝わっていないので、この本の内容は『臥遊録』に収められた2篇の文章と、南克寛の「題東國名山洞天誌」に依るほかない。まず、資料の提示を兼ねて、多少長くなるが眞實居士趙玄が書いたという序文を読んでみることにする。

わが朝鮮は偏った土地であり、昔から辺境と見られてきたため、わが國人も自らその卑しさを固守し、自らを蛮族と見、その土地の中に神山靈境として眞人と仙官の治めるところがあることが分からなかった。しかし圖牒が傳わらないからといって、嘆かないでおられようか！ 私は若いころから山遊びが好きだったが、貧しく遠くへ行くことができなかった。ただ本道の大きい山と深い谷をくまなく行脚し、人跡の及ばない所にもほとんど行って見たが、鳥道や途切れた道も、橋をかけたりくぼみを掘ってでも行った。

丙辰年(1496、燕山君2)の夏、奉天臺に登ったが、般若峰という山が一つ一番高かった。つるを掴み絶壁にもたれ掛かって千辛萬苦の末、やっとその頂上に登ると、大きな寺があり美しい色が煌びやかに映った。門を入ると、僧侶の群れが集まって人が来たのを奇異に見ていた。赤い服を着た天人が殿閣の上に座っていて私を呼んだ。

「お前は縁があってここに来たのだから訝るな。お前は、その前身が琳庭を主管した者で、罪を犯して流刑され、ここにいるのだ。私は東國總理名山洞天眞官である。ここは海東に冠たる福地である。この間、上帝が東王公の侍者である羅弘祐眞人に命じ、三韓の地を調べさせ、三大洲・五大神嶽・九嶽洞天・四十三府・二十七島・三十五洞・一百四十一山・九十九川に区分し、それぞれ仙官を分けてその任務を任された。私はすなわち可韓丈人、東垣第六輔官である。上帝の命に従い、東國の事を總括し治めており、宣徳辛亥(1431、世宗13)年からここに滞在している。婆竭王菩薩がこの山を預かって寺を大きく開き、私に任せて治めてくれることを願うので禪堂の一ヶ所を借りて眞人が朝會する場所としている。東人が神仙眞人の足跡を知らないの、私がそのために本に記して世に伝えようとする。いま智顛玄鑑老師が妙香山廣濟寺におり、よく私の文字を読むことができるので、お前がこれを伝えることができるだろう。」

袖から本を一冊出してくれたが、文字の形は梵字でも篆書でもなかった。また次のように言った。

「君が訪ねて行き、智顛大師からこの本をもらえるようになったら、八道をくまなく回って注解するようにしなさい。これまた天から降る意向だから、背いたら譴責することがある。」

私が謹んで禮拜し深くお辭儀をし、頭を上げてみると、その寺は跡形もなく、ただ荒涼とした雑草の生い茂った土地に過ぎなかった。

急いで降りて妙香山に至り、廣濟寺を訪ねると僧侶が十数人いるが、智顛大師という人はいなかった。ここに留まりながら彼を探すために100日が過ぎてもたった1日も怠らなかった。臺所の眞ん中に年老いた僧侶がおり、ぼろぼろになり床に座りぶるぶる震えながら話もできなかった。かわいそうに思って温かい汁を與えると、僧侶は全部飲み終えて次のように言った。

「可韓丈人の地誌はどこにあるんだ？」

私は急いでひざまずいて禮拜し本を捧げた。僧侶がこれを持って行きながら言った。

「お前は來年のちょうど今日、姑射山の觀音寺に私を訪ねて來られるかね？」

言い終わると飛ぶように去った。追いかけたが追いつくことはできなかった。

私が約束通り行ってみると、あの僧侶はおらず、一日中待っていたが來なかった。ふと建物の東の壁の上を見上げると、黄色い風呂敷一つが掛かっているのを持ってきてみると、まさにその地誌の翻譯を文章で書いたものだった。急いで袖の中に入れて夜中に寺に行き、その山嶽洞府の名前が付いたものを隅々まで読んで見たが、すべて俗名とは同じでない上、主管する者の官職と名前もまた前に聞いたのではないかという気持ちで非常に奇異に思った。

ついに平安道から江原道の下の忠清・慶尚・全羅の三道を経て再び黄海道に至り、鴨綠江で終えた。地誌に依據してその土地があるかどうかを探してみようと、難所を渡って波を押し切っていくら深いところも行かない所がなかったから、凡そ18年が経ってその境界をすべて涉獵することができた。

暇な日に廣濟寺の東房で詳しく見てみると、地誌の下に俗名の注がいっぱいに付けられていた。故に本にまとめ、分けて四冊とし、『東國名山洞天註解記』と命名して、藥師如來の臺座の下に隠し、知音の士がこれを取って萬代の後に信じさせることを待ち、靈嶽神山をして奇異な姿を明らかにさせようとする。もし王が尊崇し、祭祀をして封禪することがあれば、東國の民が福を受ける時です。正徳乙亥(1515、中宗10)10月初1日²。

注2…『臥遊録』(韓國精神文化研究院、韓國學資料叢書11, 1997) 295頁: 吾朝鮮僻壤也、自古視以荒裔、故我人亦自守其陋、千萬年來、遼班夷貊、不知封内、有神山靈境、眞人仙官所治者。圖牒不傳、可勝嘆哉! 僕少日喜遊山、以貧不得遠行、只踏本道大山深嶽、人足不能到處、殆遍焉。鳥道斷蹊、枉輻以達。丙辰夏、登奉天臺、山有般若峰、最高。攀蘿附壁、萬苦千辛、方陟其巔、忽有大刹、金碧照輝。入門則僧徒盈集、怪其人來。有紅衣天人坐殿上、招問曰:「爾有緣到此、不訝也。爾前身是琳庭主者、謫降在此。吾乃東國總理名山洞天眞官、此爲海東第一福地也。頃者、上帝命東王公侍者羅弘祐眞人、來相三韓之地、分爲三大洲、五大神嶽、九輔洞天、四十三府、二十七島、三十五洞、一百四十一山、九十九川、各以仙官分領其任。而吾即可韓丈人東垣第六輔官、承上帝命、總治東國之事。自宣徳辛亥住此。婆竭王菩薩主此山、大修祇林、請我寄治、故借禪堂一區、爲朝眞所。東人不識仙眞之迹、吾冀爲誌書、欲傳于世。今有智顛玄鑑老師、在妙香山廣濟寺、能辨我字、爾可傳之也。」自袖出一卷以付、則字畫非梵非篆。且曰:「爾能參方、可受此書於顛師、遍遊八道。爲註解也、亦天授、負則有譴。」余奉持作禮於地、擧頭則失其利、只荒烟蔓草之地。惆悵而下、到香山、尋廣濟寺、則僧徒十餘、無所謂顛者。因留物色、過十朔、不懈一日。廚中有老僧、

纒擁火地坐、凜慄不語。意憐之、遺以煖湯。僧飲訖、曰：「可韓丈人地誌、安在？」余遽下拜、取書以獻、僧携之以去、曰：「君可於明年今日、訪我於姑射山觀音寺也？」言訖其去如飛、追不能及。余依約而至、則無其僧、終日待之、不來。忽仰見殿東壁上、掛一黃袱、取視之、乃譯其誌、而以文書之。亟納袖中、夜就方丈、讀遍其山嶽洞府立名安號、皆與俗名不同。而主者官爵姓名、亦非前聞、心甚異之。遂自永安道、達江原下三道、遷至黃海道、終于鴨江。据誌書而探其地之有無、躡險冒波、無幽不到。凡歷十八寒暑、乃得盡涉其境。暇日就廣濟東房、發囊詳考、則俗名之註于誌下、已滿。即登子冊、分爲四卷、名曰東國名山洞天註解記、藏于藥師座下、以俟知音之士取、而篤信萬代之下、俾靈嶽神山、得現異迹。倘有世主崇敬祠封、則東民受福之秋也。正德乙亥十月初一日。

以上の内容は次のようにまとめることができる。わが國にも神山靈境があり眞人と仙官が治めているが、わが國の人々は自ら蛮夷の卑劣さを固守してこのような事實をよく分らない。しかし、これを説明する圖牒が傳わらないので一般がこれを知らないのは残念だが仕方のない事實だ。

著者である趙玄がこの事實を知ったのは若い頃からの山歩きのためだった。1496年夏、妙香山の奉天臺の裏の、人足が及ばない般若峰の頂上を千辛萬苦の末に上がってみると、意外にもそこには豪華絢爛な大きな寺と數多くの僧侶が住んでいた。彼はそこで自分の身分を東國總理名山洞天眞官東垣第六輔官であると明らかにした可韓丈人という天人と會う。その天人は彼にここが海東に冠たる福地と知らせて、玉皇上帝が東王公の侍者である羅弘祐眞人に命じて、三韓の地を見て、三大洲・五大神嶽・九輔洞天・四十三府・二十七島・三十五洞・一百四十一山・九十九川に分けて各所に仙官を派遣して管掌させたが、自分はこれらを全て總括して治めた職分を務めていることを明らかにした。もともとここは婆竭王菩薩が務めていた所に寺を開いて自分に任せるので、禪堂の片隅を借りて眞人を朝會する場所として使われているということだった。

續いて、可韓丈人は、東國の人が神仙と眞人の足跡について全く無知であることを残念に思い、東國の名山洞天とそこを司る神仙眞人についての内容を詳しく記録し世に伝えようとしているが、妙香山の廣濟寺にいる智顛玄鑑老師だけが自分の文字を読むことができるので、彼を訪ね、その後は直接八道を踏査し各所を俗名に従って注解し、みながわかるようにせよと命令を下した。

ふと振り返ると寺は跡形もない。彼は本を持って廣濟寺に行き智顛大師を探したが見つからなかった。終始氣をもんでいたが、臺所で火に當たりぶるぶる震えていた老いた僧を哀れみ温かい汁を與えると彼がまさに智顛大師だった。智顛大師は、1年後に姑射山觀音寺に来るように、という言葉を残して姿を消した。1年後に、彼は觀音寺の東の壁の上にかかった風呂敷から智顛大師が翻譯した地誌を探して読んでみた。しかし、そこに書かれた山嶽洞府の名前は俗名のようなものが一つもなく、主管者の官職と名前もすべて初耳だったので、非常に奇異に思った。その後、彼は18年間、平安道から忠清・慶尚・全羅道を経て黃海道と咸鏡道を経て鴨綠江まで全國を隅々まで踏査し、指示にしたがい實際の位置を比定し、ついに可韓丈人がくれた『東國名山洞天記』を俗名に基づき、詳細に注解することを完成することができた。ここで、これらを四冊に分けて『東國名山洞天註解記』と名づけて藥師如來の臺座の下に保管しておく、後日、見る目のある者がそれを讀み、靈嶽神山にその奇異な名残をとどめさせ、王が尊崇し、祭事を行わせ、東國の民に福をもたらすようにしたと記されている。

要するに『東國名山洞天註解記』とは、上帝の命を受け、羅弘祐眞人が三韓

の地を調べてその境界によって区分した三大洲・五大神嶽・九嶽洞天・四十三府・二十七島・三十五洞・一百四十一山・九十九川の實際の地理上の位置と、それぞれの場所を司る眞人仙官の名称を記したものである。ところで三大州と五大神嶽など、それぞれの居所が具體的にどこを指しているのかは、現在原本が傳わっていないので全く分らない。つまり東國の名山洞天を大洲・神嶽・洞天・府・島・洞・山・川など八つの範疇に分けた後、これをさらに362ヶ所に細分したものであるが、割合によって順番を配列したようだが、それぞれの數字が指示する意味や、それぞれの範疇上の差別は、序文だけでは推測できない。

玉皇上帝の命により、羅弘祐眞人が東國の名山洞天を分類し、さらにここを總括した可韓丈人が天上の文字で書いた『東國名山洞天記』を智顛大師が人間の文字に譯したが、これを眞實居士という人物が18年間、八道を回りながら踏査し、注解を付した本が『東國名山洞天註解記』なのである。いわば天上の秘記が様々な経路を経て人間に姿を現すようになったのだが、道教的に潤色された濃厚な説話的色彩を一見して感じることができる。

次に讀む文章は嘉靖乙丑年(1565)に智光という僧侶が成仏寺の方丈で作ったという「題名山洞天誌解後」である。ここでは書名を『東國名山洞天註解記』を縮めた『名山洞天誌解』と略称している。

この本を書いたのは智顛大師であるというが、智顛という名前は禪林に傳わっていないので私も信じられない。眞實居士という人は祥原の郡吏である趙玄だが、三丁一子、つまり息子三人に一人は免除する法によって官役を免れた。早くに両親を亡くし、その兄とは不仲で、ついに居士になり菩薩戒を大變熱心に守りながら、价川姑山觀音寺に隠れて暮らした。生涯、文字を知らなかったが、坐禪して18年で闊然と悟り、筆を操って文章を書いたが非常に素晴らしかった。戯れに博川の郷試に進み、三場を相次いで及第してはすぐ去ってまた隠れた。

嘉靖戊申の年(1548、明宗3)、私が普賢寺で住職を務めていた時、趙玄が訪れ數日間一緒に泊まった。詩を作って私に贈ったが、それは次のようである。

法門の中に大きな慈悲があり、	法門中有大慈悲
千里の妙香山で僧侶に遇った。	千里香山幸遇師
如來のその知らせを尋ねようとする	欲問如來消息未
半山の明るい月が深い池に入ったよ。	半山明月入深池

私はこれに筆を投げて唱和しなかった。おそらく彼はすでに不二門に入っているのだろう。旅立つ時に手紙を残したが、次のように書いてあった。

「これは私が仙師の命をうけて翻譯したものです。世に伝えようと思う

ので大師がこれを配布して後日を約束してください。」

その後15年が過ぎ、壬戌年(1562, 明宗17)に沙弥法蓮が徳川で會ったが、表情がいつものようだったという。さすが異人といえる。その後も切實に會おうとしたが、會うことができなかった。神聖なものがどうして、この世で長く入り亂れることを楽しもうか。暇な日にこの本を箱の中から取り出して読んでみると、さらに奇異だったので、本の末尾に題を書いた。嘉靖乙丑年(1565)秋8月24日、智光老釋が成仏寺の方丈で書いた³。

この文で智光は、可韓丈人の地誌を翻譯した智顛大師の名前を禪林で聞いたことがないと述べて彼の存在に神秘性を付與した後、これを注解した眞實居士については、平安道祥原郡の衙前である趙玄であるという。彼は幼い時に両親を亡くし、兄とは不仲のため家を出て居士になり、价川姑山觀音寺に隠れ住み、菩薩戒を一生懸命守った。坐禪して18年で闔然と悟り、戯れに博川郡の郷試に進み、三場を相次いで及第したが、再び隠れたという。前で彼の身分を郡吏と言ったのは及第後、彼がしばらく博川で衙前の役割を果たしたことを暗示しているようだ。

その後、智光が妙香山普賢寺住職を務めていた時、趙玄が訪れ詩を贈ってくれたが、すでに悟りの境地に入ったようだった。彼がそっと袖から、自ら可韓丈人の命を奉じて注解した『東國名山洞天註解記』を取り出し、この世に伝えることを依頼した。その後、15年後に彼に徳川で會ったが顔が少しも変わらなかったという話、その後はいくら會おうとしても會えなかったという話を付け加えた。故に趙玄が自分にその本を傳えた17年後の1565年秋に本の末尾にこの題辭をつけて世の中に伝えるようにと言った。

したがって、眞實居士趙玄が可韓丈人からこの本を受け取ったのは1496年であり、注解を完成したのがそれから19年後の1515年、この本が智光によって世に知られたのはさらに50年後の1565年になる。智光の話によると彼は幼くして両親を失い、家を出て18年間、觀音寺で居士生活をし、その後に博川の郷試に及第してしばらく衙前をしたというから、彼が実際に可韓丈人に會った時は早くても30歳を過ぎた年だったのだろう。それなら智光の沙弥の法蓮が1562年に彼と徳川で會った時はすでに百歳近い老人だったという計算になるが、智光はその姿が普段と全く変わっていないという。さらに、彼が書いたという一編の詩まで書き、會った年と文字を書いた日付まで正確に明らかにして記録した内容に信憑性を持たせようと努めた痕跡が歴然としている。

その内容が信頼できるか否かには関係なく、以上見た二篇の文章を通して我々は『東國名山洞天註解記』という本が世に出るに至った背景と、それにまつわる逸話を推測することができた。そしてその本の體裁は、まず朝鮮八道に

散在した名山洞天を各處所によって大別し、各處所を主管する眞人仙官の名称が明記された比較的簡単な本文と、その本文の下にある本文の名称が世俗の實際の地名でわかるように、詳細に敷衍した趙玄の注解が併記された形で構成されたものと考えられる。全部で4冊ということから、全體の分量は小さいものではない。その詳しい形式については、改めて後述することとする。

III. 許筠と『東國名山洞天註解記』

ところで、次に読む南克寬の『夢嚙集』に掲載された短い一編の文章は、この本と関連した問題をまったく別のレベルに変えてしまう。「題東國名山洞天志」という文がそれである。

許筠が『道藏』の諸書から抜粋して真似て作り編んだので、高位杰や乙支黃はひそかに東明王、高朱蒙と乙支文徳を指し、黃杰とは梁四公の名前でもある。他の者もすべてこれと同様、序文と跋文もすべて嘘であり、智光、趙玄などの輩も存在しない⁴。

短い文の中にこの本と関係した多くの内容が取り上げられている。要するに『東國名山洞天註解記』(彼は本の名前を『東國名山洞天誌』と記した。)という本は、許筠が創作した書物で、『道藏』の諸本からあれこれひき寫し、それらしく作ったものである。序文と跋文もすべて許筠が作ったものであり、智光や趙玄のような輩は実際には存在しなかった虚構の人物だということである。

もう一つ、この文章は、この本の内容と関連した情報をもう一つ盛り込んでいる。ここには各所を司る眞人仙官の名前として、高位杰や乙支黃のような具體的な名称が出るが、南克寬はこれらも高朱蒙と乙支文徳のような人物を密かに暗示していることを明らかにした。言うなれば、先に趙玄が序文で「主管する者の官職と名前もまた前に聞いたことがないかということで、非常に奇異に思う」という部分の具體的な實例を挙げているのである。彼は主管者の官位名と人名が、わが國の歴代に絶大な名残を残した先人の名前と一見してわからないように暗号化したに過ぎないと見ている。

この文章により、『東國名山洞天註解記』と関連した問題は、再び完全に原點に戻ることになる。いまや趙玄や智光の問題ではなく、許筠が全面に浮上るのである。また、南克寬は許筠が偽作したこの本の體裁が『道藏』諸書のそれと類似していると述べた。

では南克寬はどうやって『東國名山洞天註解記』が許筠の偽作という事實を見抜いたのか。根據となる明確な證據なしに、彼はこのように断言することはできなかったろう。南克寬は肅宗朝の少論の巨頭、葉泉南九萬の孫で、幼い

注3…『臥遊錄』295頁：此書之撰、云自智顛、顛之名、禪林不傳、吾亦未能信也。眞實居士者、祥原郡吏趙玄、以三丁一子、免官役。早喪父母、其兄不友、遂爲居士。持菩薩戒甚苦、隱于价川姑山觀音寺。平生不知文字、坐禪十八年、脫然而悟、操筆爲文、甚善。獻赴博川郷試、貫三場中式、即去還隱。嘉靖戊申年、余住持普賢寺、玄來訪、累日同宿。作詩贈我、曰：「法門中有大慈悲、千里香山幸遇師。欲問如來消息未、半山明月入深池。」余爲之投筆不和、盖已入不二門者也。臨行以書留之、曰：「此吾奉命師之命、譯之者。欲傳于世、師其布之、約以後日。」此後十五年壬戌、沙彌法蓮、逢於徳川、顔貌如常、果異人也。厥後切欲逢之、不得遇焉。豈神聖之迹、不肯久混於世上耶？暇日、發此書於篋中、讀而尤異之、謾題于尾云。嘉靖乙丑秋八月二十四日、智光老釋、書于成佛寺方丈。

注4…南克寬、夢嚙集 乾、章25a：許筠取道藏諸書、蹈襲結撰、以成此書、如高位杰乙支黃崙暗影東明文徳、而黃崙杰又梁四公之名也。餘皆類此、序跋並偽、智光趙玄之輩、烏有也。

頃から脚気を患い、家の中で本ばかり読んでいたが、25歳という若さで夭折した天才的な文人であった。彼は本のしわを9回も変えたという話があるほど讀書マニアだった。そうであれば、彼が『東國名山洞天註解記』を求め読み、その偽造者を許筠と名指した時は手がかりになるようなものが確かにあったはずだが、上に彼が書いた短い文や、他に彼の文集からは全く見當がつかない。

だからといって筆者の立場で、無条件に彼の言葉だけを信じてこの本の実際の著者を許筠と断定し、この本の意味を推し量ることはできない。方法としては許筠の『惺所覆瓿藁』を通して直接、偽造の證據を探し出すしかない。

実際、偽作という色眼鏡をかけてこれらの資料を調べると、まず、趙玄の別号を「眞實居士」としたことから疑わしい。あえて「眞實」を前面に出したのは、つまり眞實ではないことから来る自意識の發露と考えられ、平安道祥原郡の一介の衙前が、それも18年間菩薩戒だけ一生懸命修行した居士に過ぎなかった彼が、ある日、急に文理を悟って郷試に續けて及第したということも信じられない。さらに、彼が直接見聞したという多くのことは、典型的な道教の仙境説話の構造にそのまま従っている⁵。そして跋文を書いた智光は妙香山普賢寺の住職を務め、趙玄が敢えて彼を訪ねるほど身分と道力が高かったにもかかわらず、仏教史において彼の存在は全く現れない。文體面でも2編の文は大差ないので、大體このような情況だけでもこの本が眞實に基づいて作られたものでないことは容易に見當がつく。

問題はこの本を作った者が他ならぬ許筠という点におかれている。実際、許筠の『惺所覆瓿藁』を『東國名山洞天記』の觀點から細かく読むと、我々は意外にもこれに関連した情報を多く得ることができる。以後、これについて具體的に取り上げ、前の南克寛の主張の持つ信憑性を確認してみることとする。

まず眞實居士趙玄と関わる問題だ。『惺所覆瓿藁』巻6には「祥原郡王塚記」という文が載っている⁶。祥原郡とは前に見た眞實居士趙玄が衙前を務めたという場所だ。内容は、平安道祥原郡北十里ほどの王山村という場所に王塚が一つあったが、1607年7月、大雨で墓が崩れた。その時、村人の趙壁は幼くして僧侶となり、文を少し理解する者であるが、彼が村人を率いて行き曠中で様々な遺物を目撃した。墓の中にあつた石鐘の上に「神明大王墓」という五文字が大きく書かれていた。趙壁が村の人々と一緒に土でこれを再び覆うと、その夜、夢に赤い服を着て金の帯を巻いた神人が現れ感謝の意を伝え、以後3年間、豊作をもたらしてこれに應えたという話だ。許筠はこの話を趙壁から直接聞いたと言った。

この文に出る趙壁は祥原郡の人であり、幼くして僧侶となり、文を少し理解するという点で前に見た趙玄をすぐに想起させる人物だ。趙壁は實在の人物であり、「祥原郡王塚記」は実際に起きたことを記録したものであるが、我々はここで許筠が趙壁を念頭に置いて趙玄という虚構の人物を作り出した可能性を

容易に推測できる。特に、前に高朱蒙を高位杰とし、「高氏の中で地位の高い人物」と暗号化するという例からも分かるように、眞實居士という別号とともに玄虚・玄妙などの言葉からも分かるように、「趙玄」の「玄」もまた彼が架空の人物であることをはっきりと暗示している。

また、智光の名前が「祥原郡王塚記」のすぐ前に載っている「原州法泉寺記」に、高麗僧侶の智光の塔碑の話をしながらか見せている点も興味深い。智光は高麗文宗の時の國師であるが、許筠はこれをこっそり借りてきて『東國名山洞天註解記』の跋文を書いた朝鮮中期の妙香山普賢寺住職を務めた僧侶智光に化けさせたのである。

また『惺所覆瓿藁』巻7にある「沙溪精舍記」という文は、許筠と『東國名山洞天註解記』との關連を示す、より具體的な心證を與える。その文の一部を讀んでみることにしよう。

南原は昔の帶方國である方丈三韓であつた。秦の時代から方士たちは三神山が東海の中にあり、そこに神仙と不死の薬があると云つたが、君主としてこの言葉をよくここに置く者がいなかった。私がかつて『五嶽眞形圖』および『洞冥記』『十洲記』を得て考察したところ、三神山が東海にあると記されているが、わが國を除いてここにはありえず、そのいわゆる方丈にあるというのはすでに帶方にあるので、瀛洲・蓬萊もやはり金剛山と妙香山の外からは抜け出せないに違いない。もしそうだとすると、そこは神靈な区域で人は十分に登れない場所だから、必ず上に本當の上眞・天仙がいて、福地を掌握し洞天を受け持ち、その仕事を治めているが、この世にこれを知る者がいない。このような眞仙の輩が亂れたことを嫌って、手を横に振りながら會おうとしなかったのではないか？ それとも人間が自ら縁が薄くて到達できないのか？ これは分からないことだ⁷。

許筠はこの文章で『五嶽眞形圖』と『東明記』『十洲記』などの中國の古記を得て讀んでみたという。このうち『十洲記』『東明記』などは『道藏』の中に載っている。彼は中國の古記に書かれている三神山が韓國にあると断定し、方丈は智異山を、瀛洲は妙香山を、蓬萊は金剛山を表していると考えた。また、その頂上、人の出入りができない場所には神靈な区域があるため、上眞・天仙が福地を掌握し洞天を担当し治めているが、世の人々にはこれを知る者がいないという。ところでこの内容は、前に見た趙玄の『東國名山洞天註解記序』の内容とその趣旨が似ている。いわば『東國名山洞天註解記』は、許筠が「沙溪精舍記」の上記の部分を書きながら抱いていた思いを具體化したものとも見ることができる。

この他にも『東國名山洞天註解記』を許筠と關連付ける決定的な資料がもう

注5…出發—歷程—回歸の構造からなる遊歷仙境傳説に關しては、李豊楸「六朝仙境傳説與道教之關係、誤入與謫降」『六朝隋唐道教文學論集』(臺灣、學生書局、1996)と、同書に収録された「道教洞天説與遊歷仙境小説」などの論文を参照。

注6…『國譯 惺所覆瓿藁』(民族文化推進會、1989) II、88頁参照。

注7…『國譯 惺所覆瓿藁』(民族文化推進會、1989) II卷、115頁参照。

一つある。道教の修練小説といえるほど道士の内丹修練の過程を詳しく描寫している『南宮先生傳』がまさにそれである。

姦通した妾と幹部を殺し、殺人犯として護送される途中で逃げ出した南宮斗が太白山に行く途中で宜寧にある野庵に泊まるのだが、觀相だけで自分のすべてのことを當てる異僧に會って教えを求めると、彼は茂州の雉裳山にある自分の師を訪ねることを勧める。これに南宮斗は方向を變えて雉裳山に到着し1年以上、山全體を探しながら數十の寺院をくまなく探し回ったが、異僧に出會うことはできなかつた。この部分はまるで趙玄が可韓丈人の指示を受けて智顛大師を探し回る光景を連想させる。

苦勞して仙師長老に出會った南宮斗はあらゆる困難を乗り越え、内丹修練に入り大きな成功を取めたが、最後の段階で慾念が沸き起こって泥丸が燃えたため、ついに神胎をつくることができず、地仙の境地に留まってしまふ。南宮斗が後に長老にその出所を尋ねると、仙師は自分が權幸の曾孫で、熙寧2年(1069)に生まれ、14歳で癩病にかかって捨てられ、虎穴の中で草羅という草を食べると癩病が自然に治ったという話を聞かせてくれた。その後、彼は太白山の頂上にある禪房を訪れ、老いて病んだ僧からその師の秘訣書を傳えられた。その本は新羅の義湘大師が中國の正陽真人からもらったという秘訣で、『黃帝陰符經』・『金碧龍虎經』・『參同契』・『黃庭内外經』・『崔公入藥經』・『太息心印』・『通古定觀』・『大通清淨』などの經典であった。その後、11年の修練の末、ついに神胎を作り上仙になって天上に上ろうとしたが、上帝が東國の三道諸神に従えという命令を下したため、ここに約500年間留っていると云った。この内容もまた、趙玄が般若峰を千辛萬苦の末に登り、可韓丈人から秘訣書である『東國名山洞天地』を傳授してもらい、可韓丈人の出處を聞く内容を彷彿とさせる。

最も興味深いのは、長老が三道諸神の朝會を受ける場面だ。山奥いっばいに數千數萬の燈火が真畫のようにかかり、奇異で奇怪な姿のあらゆる獸數百頭が現れ、指揮する旗を持った金童玉女數百人と旗幟槍劍を持った軍隊1千人餘りが取り囲む中、諸神たちが順番に華やかな服装で到着する。諸神の朝會の順番と名称を整理すると、次のとおりである。

三大神君：東方 極好林・廣霞・紅暎山
五洲眞官：蓬壺・方丈・圖嶠・祖洲・瀛海
十島女官：東南西海 長離・廣野・沃焦・玄隴・地肺・摠眞・女几・東華・仙源・琳宵
七道司命神將：天印・紫蓋・金馬・丹陵・天梁・南壘・穆洲
五大神將：丹山・玄林・蒼兵・素泉・赭野

五神所統山林藪澤嶺瀆城隍諸鬼伯鬼母：五百餘名

言わばこれらは東國三道諸神の名称だ。一般的に神仙たちの社會は徹底した官僚制による位階が厳しい集團である。三大神君・五洲眞官・十島女官・七道司命神將・五大神將と五大神將の管轄下にある山林藪澤嶺瀆城隍諸鬼伯鬼母たちの中には、嚴然たる位の差が存在する。三大神君の場合、長老が立ち上がって手を合わせると、三大神が二度禮をして退き、五洲眞官の場合、長老が立ち上がるだけで神々は二度禮をして退く。しかし十島女官は座って禮を受け、七道司命神將は禮をせずに退き、残りの五大神將と鬼伯鬼母たちは並んで4回禮をして退く。名称から見ると、神君が最も高く、眞君と女官がその次であり、その他に神將と鬼伯鬼母たちは最も下層の品階に該當する。

ところで『南宮先生傳』に見える三道諸神の品階と名称が、前の『東國名山洞天註解記』に見える三大洲・五大神嶽・九輔洞天・四十三府・二十七島・三十五洞・一百四十一山・九十九川の體系と非常に類似しているという事實が、私たちの關心を引く。『南宮先生傳』に照らすと、三大洲の場合、當然三洲眞官がいるはずであり、五大神嶽には五大神君がいなければならないはずだ。また九輔洞天と四十三部にはそれぞれの神將がいるであろうし、二十七島には女官が、その他に洞と山と川には必ず山林藪澤嶺瀆城隍諸鬼伯鬼母たちが役割を分担し管轄している内容が『東國名山洞天註解記』に詳細に書かれていたものと見られる。

このように見ると『東國名山洞天註解記』の眞の著者を許筠と斷定した南克寬の主張が、何の根據もなく出たものではないことがより明らかになる。具體的に確認することはできないが、南克寬はこれらのほか、この本の偽作者を許筠と斷定できる根據をさらに持っていたと考えられる⁸⁾。結局、『東國名山洞天註解記』は、許筠が架空の人物を前面に出して書いたことがほぼ確實となった。

いまや残る問題は、なぜ許筠は苦勞して本を著しながら、架空の人物を前面に出し、もっともらしく包装して世間に廣めようとしたのか、という点である。これは『東國名山洞天註解記』の創作目的を推し量ることと關係する。これを付度するにはまず許筠がこの本を生涯のどの時期に書いたのかについて調べる必要がある。

趙玄のモデルになったであろう趙壁が「祥原郡王塚記」に出、その他に「沙溪精舍記」と『南宮先生傳』がすべて『東國名山洞天註解記』の内容と關連があると見て、『東國名山洞天註解記』がこれらの作品より後に書いたと考えるのは自然である。祥原郡で幼い頃から僧をしていた趙壁に直接會い、「祥原郡王塚記」を作る前に、偶然、同じように祥原郡の人で、幼くして寺に入って居士となり、18年で文字を悟った趙玄という人物を想定することはできないか

注8…南克寬は許筠について關心が高かったらしく、彼の文集である夢嚙集坤、章32bで、「公州人吏傳説、許筠爲牧、每衛罷、躡履階除、負手長詠、聲調清遠、若憂哀玉、望之者謂天人也」といった記録が傳わっている。

前に提示した様々な編文の他にも、例えば『惺所覆瓶菓』卷14に収録されている大嶺山神贊のような文章は大嶺嶺の山神として崇められる大將軍・金庚信を溟州府司で祭祀すると、靈驗を露にしたことが記されている。ここに見える金庚信の場合も、前の高朱蒙や乙支文徳の場合のように、名称が異なるので、『東國名山洞天註解記』の中で高い品階の眞官として載っているものと見える。

らである。祥原郡で王塚が崩落したのは1607(宣祖40)年7月で、その後3年連続で豊作を迎えたとあり、趙壁が許筠を訪れたのはその後であるから、少なくとも「祥原郡王塚記」は1609(光海1)年以降に作られたことになる。

また『沙溪精舎記』は、許筠が科挙試験に甥を不正合格させた疑いで咸悅の地に流刑された時期に作られた作品であるが、彼が流刑されたのが1610年12月であるから、この文章もまたその後には作られたことが明らかであり、『南宮先生傳』は公州で罷免された後、扶安に住んでいた1608年、南宮斗に會って聞いた話を後に整理したものである⁹。このように見ると、許筠が『東國名山洞天註解記』を書いた時期は早くとも1610年以降であることは間違いない。しかも、4巻に達する膨大な分量の著述は創作にかなりの時間がかかったに違いない。そうすると、この本の完成は少なくとも1610年から1、2年が過ぎてから可能になったと判断される。

もう少し具体的にみると許筠は1610年12月、咸悅に流罪になって以来1611年11月に島流から解放され、ソウルに少し寄ってすぐに全羅北道扶安に行くことになるが、その後1613年12月まで扶安に泊まったり湖南地方を旅行しながら過ごした。その後、1614年2月、戸曹参議に任命され、直後、千秋使として中國に行ってきた後、1615年8月にも陳奏副使として中國に行くなど忙しい官職に就き、これ以上のんびりとこの種の執筆に没頭できる状況ではなかった。そうならば『東國名山洞天註解記』は、1610年12月から1613年12月の間、主に彼の咸悅流罪と扶安滞在時代に行われたことが明らかとなる。併せて創作心理の過程を類推してみると、「沙溪精舎記」を書きながら感じた問題意識と『南宮先生傳』を創作し、関心を持つようになった眞人仙官の世界に対する興味が共に作用し、「祥原郡王塚記」を書くようになったきっかけを作った趙壁などの人物を虚構化して、一つの體系を備えた傳作の秘訣書を創作しようという欲求にまで発展したものと見られる。

許筠は周知の通り1618(光海10)年に謀反を企て逆賊として斬刑された。『東國名山洞天註解記』が少なくとも1611年から1、2年でようやく完了できたという推論が可能ならば、この本は彼の生涯の後半に書かれたものである。彼はなぜこの本を書いたのか。苦勞して作った後、どうして匿名で流布させたのか。彼はこれを通じて得ようとしたもの何だったのだろうか。単純に趙玄の序文で可韓丈人の口を借りて述べているように、東國の民が自らを蛮族と見、その領域内の神山靈境に眞人と仙官の治めるところがあることを知らないことを残念に思ったからであろうか。それとも『南宮先生傳』で描かれた神仙たちの世界をより廣げ、體系化したいという創作への欲望のためだったのだろうか。前者ならば、存在しない事實を捏造して創作に没頭するような積極的な理由にはならず、後者ならば、自分の名前をあえて隠したことについての説明が難しくなる。

ところで前に趙玄の序文の終わりで「靈嶽神山を奇異な名残を現し、王が尊崇して祭祀を行い、封禪があれば、東國の百姓が福を受けるときである」とした主張が我々の注目を集める。筆者はここで、彼の謀反と死をめぐる場でしばしば登場する『山水秘記』の存在について関心を持つようになった。

『朝鮮王朝實錄』光海4年(1612)9月14日付の記録を見ると、地理學教授である引儀李懿信が、國都の氣運が衰えたため、交河に遷都すべきだという上訴を出したことが載っているが、彼は同年11月15日に再び上訴し、都城の王気がすでに衰えたので、交河県に都城を作るべきであることを様々な讖緯書と方術の記録をもとに強く主張した¹⁰。

一介の術官に過ぎなかった李懿信が、このような上訴を行うことができたのは、光海5年1月1日と2月23日の實錄の記事を見ると、光海君の密かな指示を受けて行われたことが分かる。その後、李懿信に罪を與えなければならぬという上訴と建議が數百回に達するまで續いたが、光海君は結局、李懿信を庇い、彼にいかなる罰も下さず、むしろ實職を下し、重要な仕事の決定に参加させるほど彼に対する信望が深かった。光海8年(1616)3月24日の記事にも、「狂僧である性智が地理に関する方書をよく理解している」と述べながら、仁王山の麓に王宮の場所を定めなければならないと主張したことが記されている。

『實錄』を通じて見ると、光海君は、昌德宮を端宗と燕山君が廃置した事件があったため、宮殿を移そうという考えが以前からあり、謀反事件が相次いで発生し、王室をめぐる雑音が止まらなかったため、民心が大きく動揺すると遷都問題を深刻に考慮していた。このような隙に乗じて山水秘記や圖讖書が横行することになったが、李義信の上訴とそれをめぐる論争は、これまでの事情を推測するに十分である。

ところで問題は、許筠も、謀反と関連したある事件において、この遷都説に深く關与しているという事實だ。『實錄』光海9年(1617)12月24日付の記事には、許筠を弾劾する奇俊格の上訴が掲載されているが、その中で「許筠は金悌男と共謀し、都を移そうという議論を主張しました。讖書の本文に無い語を加えて「第一は漢、第二は河、第三は江、第四は海である」とありますが、河というのは交河のことでした」というくだりが見られる。また、光海10年(1618)2月9日には、幼學文義男が、奇俊格と奇自獻の處罰を要請しながら、「奇自獻が方書をたくさん集め、毎日術師を迎えており、道統煉記が羅德秀の家にあるという話を聞くと、捕まえてくるよう啓請し、その煉書を得た後に止めた」云々という内容と、同年8月18日、許筠の供述で、奇自獻が慶州の蛇山は千年の王気を帯びた土地であるから妾を盜葬し、帝王の福を享受しようとした、という内容がある事実などから、當時、このような山水秘記類の圖讖書が、王室だけでなく知識人集團の内部でも盛んに行われていた事情が分かる。

注9…實際、『南宮先生傳』も『東國名山洞天註解記』に照らし、許筠が加減なく南宮斗の話をそのまま書いたわけではないと思う。たとえ南宮斗が實在の人物だとしても、許筠はここに自分が知っていた神仙故事と内丹修練に関する知識を總動員して小説的誇張と潤色を経てこの作品を創作したものと思われる。

注10…以下、實錄に関する内容はソウルシステムの邦譯本「CD-ROM 朝鮮王朝實錄」によるものであり、別途の脚注はつけていない。

許筠は8月18日の供述で、前の奇俊格の告発について、「世に傳わる『山水秘記』はとくに世間に出回っています。讖書を家に保管することは律文に罪が重いので、臣は見逃すだけです。遷都の説は壬子年に出てきましたが、數十年前に臣がどのようにあらかじめ勝手に添加できるでしょうか。」と言い逃れをした。しかし8月22日、弘文館の館員たちの連名上訴文では、「天が生んだ怪物である許筠が200年の宗廟と社稷に災禍を転嫁させようとした前後の凶悪で秘密な状況について、誰もが心の中で嘆いていましたが、口では言えなっただけです。……許筠が一生の間に犯したことはあらゆる悪行を備えているのに、常道を亂す醜態は二度と人の道理を期待できないほどでした。喪中に娼妓を連れこんだほか、怪しいことを興し、讖言を操作することはまさに彼の得意技であり、亂を貪り禍を樂しみ、それが及ばないことを心配しているようでした」と激しい非難を受け、結局は『秘記』に依託して讖言を作り出し、密かに遷都の説を廣め、凶撃と凶書を張り出して謀反を企てた逆賊の頭と目され、8月24日に八つ裂きの刑に處されてしまった。

彼を死に追いやった謀反事件は、さまざまな複合的な内容が錯綜しており、當時の政治現實の複雑かつ微妙な情況と個人的な恨みつらみの關係まで絡んで起こったため、本稿で本格的に扱う問題ではないが、許筠の罪目の中に少なくとも『山水秘記』に依託して遷都することを主張し、秘記の内容を一部加筆までしたという事實が數回にわたって言及されている點は、我々の興味を引く。それでは、彼が加筆までしたという『山水秘記』は、果たして『東國名山洞天注解記』と何の關係もないのだろうか。『惺所覆瓿藁』付録2に記載されている、奇俊格の上訴に対する反論の上訴で許筠が「この讖言は20年前の宣祖の時からあったもので大分昔のことだ」¹¹と言ったものと傳えられてきたことからすると、この『山水秘記』がすなわち『東國名山洞天注解記』を指すものとは見られない。しかし、光海4年(1612)から起り、幾度となく國中を騒がせた遷都説の最中に、『東國名山洞天注解記』が許筠の手によって書かれた事實を想起すれば、この二冊の間には何らかの脈絡があると見て無理はなさそうである。『東國名山洞天注解記』の實物がない現状では断定できないが、この本の中に載っている洞天福地の説明の中に、このような遷都説をあおり、特定の場所を暗示する内容が含まれている可能性は十分であると考えられる。

いずれにせよ『東國名山洞天注解記』の偽作と關連して、許筠はある種の意圖を持っていたことは明らかである。創作時期は、前後の事情から考えて、遷都説が熱い争点となった光海5年(1613)前後の時期であったと判断される。ただし、許筠が『東國名山洞天注解記』を書いたことが純粹にわが國の道教の自主的な力量を誇示するための意圖から出たものか、逆謀と關連した不純な目的から出たものかを明確に分けて判断することは、本書の實物が傳わらない現在では論者の力量の外にある。

IV. 『東國名山洞天注解記』の道教文化史的な意味

許筠の創作と判明した『東國名山洞天注解記』は、ただの偽書に過ぎない無価値な資料なのであるか? そうではない。許筠の創作であることが明らかになったことから、むしろこの資料は韓國道教文化史においてはじめて市民權を獲得できると思う。

王朝のはじめから持續的な發展を繰り返してきた朝鮮時代の道教は、宣祖朝になると、文化の全面に突き出し、非常に多様で活潑な様相を呈する。鄭璫は『北窓秘訣』を残し梅月堂の『龍虎譚』を繼いで内丹學の正心な理論を整理し、許筠は前に見たように『南宮先生傳』を書き、當時盛んに行われた内丹學の修練過程を實在の人物である南宮斗の生涯にのせて説明した。その他、柳亨進や宋天翁という實際の修練に力を入れた道士の存在が、當時の文人たちの文集に度々取り上げられており、權克中は『金丹吟』のような連作詩を通じて内丹學の修練過程を詩の形式で説明する一方、『周易參同契演說』のような注解書を残している。

澤堂李植(1584-1647)のような謹嚴な儒者の手を経て、『海東傳道錄』または『海東傳道秘記』という本が世の中に姿を現わすのもこの時期だった。文學の分野では許蘭雪軒が『遊仙詞』87首をはじめとし、多くの作品を通して歴代の神仙の故事を幻想的な筆致で描いており、李春榮は『讀神仙傳53首』を残している。これに續いて張景世も「遊仙詞」87首を残している。この時代の文人たちの文集の中で、いくつかの遊仙詩を目にすることは、さほど珍しいことではない。これらの遊仙文學はすべてが歴代の神仙故事を十分に熟知した上で、個人の叙情を仮託しているので、當時の文化全般にわたる道教傳説の流布狀況と道教に対する一般の愛好がどれほどだったのかを推し量ることができる。

その他、『青鶴集』と『梧溪集』のような道流たちの實際の修練過程と關連した秘記もこの時期を前後して續々と出現し、一見、根據のないでたらめなまでの道教傳説を廣めた。これは一般の全面的な好評と期待の水準が無くては決して可能なことではない。特に許筠の『東國名山洞天注解記』は、道教の洞天福地説に対する幅廣い理解をもとに、中國と対等な立場から、韓國にも、それと同じ洞天福地が各所にあり、真人仙官が統治している幸福な地であることを内外に誇示しようとした意圖として讀む時、この本は韓國道教の文化の力量を極大化した時点で現れる主體道家の自主化・土着化の努力の一環としてその意味を與えることができる。

本節では、前に見た南克寬の「許筠が『道藏』の諸書から抜粋して眞似て作り編んだ」といった発言と關連して、道教傳來の洞天福地説について簡単に見、

注11…『國譯 惺所覆瓿藁』
(民族文化推進會、1989)
III、314頁

注12…洞天福地説に關する議論は、三浦國雄、洞天福地小論、道教學探索第6章(臺灣 國立成功大學 歷史系 道教研究室、1992)、233-278頁と李豐楙、誤入與謫降-六朝隋唐道教文學論集(臺灣 學生書局、1996)の中の六朝道教洞天説與遊歷仙境小説と六朝仙境傳説與道教之關係、そして趙有聲ほか共著、生死・享樂・自由(臺灣 雲龍出版社、1991)中の第6章、神仙境界與凡人企羨がよい参考となる。

注 13…司馬承禎『洞天福地天地宮府圖』（『雲笈七籤』卷 27、『正統道藏』第 37 冊、太玄部（臺灣：新文豐出版社，1987）：夫道本虛無因、恍惚而有物氣元沖、始乘運化而分形。精象玄著、列宮關於清景；幽質潛凝、開洞府於名山…誠志攸勤、則神仙應而可接；修鍊克著、則龍鶴乘而有期至於天洞。

このような清景名山に運化に乗って忽然と開かれる宮闕洞府は常に變化する中にあり、縁のある者の前で一瞬その姿が現れる。前に趙玄が可韓丈人から指示を受けて禮拜して顔を上げると、寺は姿を消し雑草だけが生い茂っているだけだったという言及や、その他の数多くの仙境説話で一度そこを出た後、再び訪れることができなかつたという言及はすべてこのような意識の反映である。

注 14…司馬承禎前掲書：太上曰：十大洞天者、處大地名山之間、是上天遣群仙統治之所。其次三十六小洞天、在諸名山之中、亦上仙所統治之處也。其次七十二福地、在大地名山之間、上帝命真人治之、其間多得道之所。

ここで 10 大洞天と 36 小洞天を司る上仙は、神仙の中でも最高の境地である天仙を、72 福地を治める真人は地仙をそれぞれ指し、洞天と福地の間にも厳しい位階があることを示している。

許筠がこの本を著述し、参考にしたような『道藏』の諸書の體裁を通じ、逆に『東國名山洞天註解記』の具體的形式を推論してみよう。

洞天福地とは、名山勝地の深い所に位置している神仙たちが居住するという別世界をいう¹²。唐代の上清派の天師だった司馬承禎（647-735）は、その『天地宮府圖』で各所に散在している 10 大洞天と 36 小洞天、72 福地を紹介しながら、その序文で「道は本來、虚ろで因がなく、恍惚として物氣が溢れており、機運の調和に乗り形状が分かれる。精象が玄明に明らかになって清景に宮闕が増え、幽質が潜凝して名山に洞府が開かれる」と言い、さらに「誠實に道を修すれば神仙も感應して迎接することができ、修練を成すと龍と鶴に乗り天洞に至ることができる」と述べる¹³。續いて、10 大洞天は「大地名山の間にあり、ここは上天が群仙を派遣して統治するところ」と言い、36 小洞天は「様々な名山の中にあり、また上仙が統治するところ」と述べ、72 福地はその次の場所で、「大地名山の間にあり、上帝が真人に命じて治めさせ、その間には得道することが多い」と述べている¹⁴。

以後、36 洞天、72 福地の説が具體的な地名と共に様々な文献で議論されたが、唐末五代の道士・杜光庭（850-933）が作った『洞天福地嶽瀆名山記』はその代表的な著述の一つである。彼はこの本で司馬承禎の『天地宮府圖』をさらに擴大して天上玉清の上の大羅天の下の玄都玉京山をはじめ多くの山と三境之山、そして十洲三島五嶽、中國五嶽、十大洞天、五鎮海瀆、三十六靖廬、三十六洞天、七十二福地、靈化二十四などと、さらに詳細に敷衍して、その範囲を地上だけでなく、天上や海上にまで擴張させた¹⁵。

許筠が『東國名山洞天註解記』を作るに際して主に参考にしたのは、まさに司馬承禎の『天地宮府圖』と杜光庭の『洞天福地嶽瀆名山記』だったものとみられる。このほか、『道藏』に収録されている東方朔の『十洲記』と『洞冥記』、杜光庭の『錄異記』、そして北宋の道士・李思聰の『洞淵集』に掲載されている福地洞天と関連の記録なども主要な参考資料にした¹⁶。特に「南宮先生傳」に見える三大神君の管轄下にある廣霞山と紅映山は他の所には見えず、杜光庭の『洞天福地嶽瀆名山記』に天上の玉清の上大羅天の下に位置した諸山の一つで紹介されていることから、特にこの本は「南宮先生傳」の創作にも活用されたことが明らかだ。その他に『洞天福地嶽瀆名山記』で十洲三島五嶽の中で様々な山として紹介されている方壺・沃焦・蓬萊・員嶠・穆洲・地肺・祖洲・長离・廣野・金華・紫空・玄洲などの名称は、「南宮先生傳」では、蓬壺・方丈・沃焦・圖嶠・穆洲・地肺・祖洲・長離・廣野・東華・紫蓋・玄隴などのように、そのままか、あるいは一文字だけ變えて出ている。もちろんここには中國側文献に見えない地名も少なくない。先に『道藏』の諸書から抜粋して纏めたという南克寛の指摘を想起する際に、『東國名山洞天註解記』に出てくるいくつかの地

名の命名方式もここでは大きく外れないと論者は確信している。

ここで、これらの本において、各所の地名を紹介する方式を参考にすることにしよう。

[1] 瀛洲は東海の眞ん中にあり、土地は四角で四千里である。大抵、會稽と向き合っている。西岸から 70 萬里を行くと、上に神芝と仙草が育ち、また玉石があるがその高さが千丈にもなる。泉が湧き出ているが、それは酒のように甘く、これを名けて玉醴泉と言うが、これを數升だけ飲むと、ふっと酔って人を長生させる。洲の上には仙家が多い。風俗は呉の人と似ていて山川は中國と同じである¹⁷。

[2] 東岳泰山は嶽神が天齋王であり、仙官と玉女 9 萬人を従える。山は周圍が二千里あり、荊州奉符県にある。羅浮山と括蒼山を佐命とし、蒙山と東山を佐理とする¹⁸。

[3] 第一 地肺山。江寧府と句容県の境にある。昔、陶隱居が隠れ住んだ所であり、真人謝允がここを治める¹⁹。

[1] は『十洲記』の引用であるが、ここは主管する仙官真人の名前はなく、位置と規模、特産と景色について描寫している。[2] と [3] は『洞天福地嶽瀆名山記』と『天地宮府圖』からそれぞれ一つずつ任意に選んでみたものである。やはり位置を比定しており、ここは主管する嶽神と仙官の名前を明らかにしている。先に南克寛の言及から、『東國名山洞天註解記』の叙述體裁は「2」と「3」の方式をとるが、分量が 4 卷に達することから、本文の説明がより詳しく、本文とは別に注解の形式を借りて、實際の地名を比定した内容が比較的詳細に書かれたものと判断する。そして、その注解の内容は『東國輿地勝覽』などの諸書を参考にした上に、若干の神秘的色彩を加えたものであったはずである。

實際に、韓國で洞天福地を訪ねる仙境求尋説話が文献として初めて確認されるのは、高麗中葉の李仁老の『破閑集』に見える青鶴洞の話からだ。その後、このような洞天福地と関連した説話はしばらく見られなかったが、朝鮮中期の宣祖代から前後の時期になって再び登場するようになるが、これは一過性のものでなく、非常に多様な様相を呈している。『東國名山洞天註解記』の序文と跋文が載っている『臥遊錄』だけでも、これと関連する諸記録がかなり多く見られ、以後、様々な文献説話にもこのような洞天福地説話は持續的に現れる²⁰。このような洞天福地説話に現れたユートピア意識については、すでに論考を異にして検討したことがあるので、ここでは再論しないこととする。

注 15…杜光庭『洞天福地嶽瀆名山記』（傳統道藏第 18 卷、洞玄部、記傳類）に収録されている。この理由のために、四庫提要、子部道家類存目ではこの本について「皆神仙幻言之言、故雖紀山川、亦不隸之於地理類」と言って下の地理類の範疇から排除することまではしない。

注 16…司馬承禎『天地宮府圖』は『道藏』第 37 冊、太玄部に掲載された張君房『雲笈七籤』の中に収録されており、東方朔『十洲記』は上記の同じ本と『道藏』第 18 冊洞玄部に載っている。杜光庭『洞天福地嶽瀆名山記』と『錄異記』もまた『道藏』第 18 冊洞玄部に載っており、これは李思聰の『洞淵集』にも福智洞天に関する詳細な記録が記されているが、これは『道藏』第 40 卷、太玄部に収録されている。他にも『道藏』37 冊、太玄部に記載された陶弘景の眞誥などが福智洞天と関連した主な著述だ。

注 17…東方朔『十洲記』（道藏卷 18、洞玄部 記傳類、457 頁）：瀛洲在東海中、地方四千里。大抵是對會稽、去西岸七十萬里、上生神芝仙草、又有玉石、高且千丈。出泉如酒味甘、名之爲玉醴泉。飲之數升、輒醉、令人長生。上多仙家、風俗似吳人、山川如中國也。

注 18…杜光庭『洞天福地嶽瀆名山記』中國五嶽の中、「東嶽泰山、嶽神天齋王、

領仙官玉女九萬人。山周廻二千里。在袁州奉符縣。羅浮山括蒼山爲佐命、蒙山東山爲佐理。」

注 19…司馬承禎『天地宮府圖』七十二福地の中「第一地肺山。在江寧府句容縣界、昔陶隱居幽棲之處。真人謝允治之。」

注 20…イ・ジョンモク教授は『臥遊録』の解題において、作者未詳の遊金剛山序をはじめとし、成渾の雜記 2 編、柳夢寅の古香山記聞、檜山洞記、楊士彦の眞夢錄などを被世の場所を提示した遊記類に分類して言及している。この中、筆者が見たものでは、古香山記聞は『東國名山洞天注解記』とも関連する一面がある。この他、朝鮮後期の文献説話に登場する洞天福地に関する議論は、イ・ジョンウン・ジョンミンほか『韓國文學に現れたユートピア意識研究』（韓國學論集）（漢陽大學韓國學研究所、1996）を参照のこと。

注 21…「遊金剛山序」『臥遊録』39 頁：將尋八十一福地、求三十六洞天、入無生之界、登不死之庭、處膠陽之館、臥藥珠之宮、春食朝霞、夏食沆瀣、啖松食栢、茹芝服朮、飯胡麻煮人蔘、漱雲牙嚙玉池、修丹竈鍊黃金、披青囊銘、誦黃庭偈、閱紫庭之誥、措碧篆之文、即中皇經：「服元和除五穀、必獲廖天、得眞訣」者也。跨白鹿騎青牛、招羽人金衣鶴、謁太上玉宸君、即神仙訣錄：「有天仙地仙、由地

とにかく、この時期に名山勝地に真人仙官が治める別世界があり、人間の吉凶禍福を司るという信仰が、民間に広がっていたことだけは明らかな事実である。『東國名山洞天注解記』は、まさにこのような意識が集大成されて現われた結果である。たとえ純粹ではない目的を持って創作された偽書であっても、文化史の観点から見ると、この本は當代の民間に根ざした道教の影響力がどれほど強かったかを証明する有力な證據になる。實際、『道藏』に掲載されている福地洞天に関する著述も、荒唐無稽さでは、『東國名山洞天注解記』のそれと全く変わらない。

『臥遊録』に載っている作者未詳の「遊金剛山序」は 1525（中宗 20）年に作られた山水遊記だが、これにはイ・ジョンムク教授が解題で説明している通り、『十洲記』・『神仙傳』・『神異經』・『述異記』・『道書福地記』・『洞冥記』・『河圖括地』・『集仙傳』・『太清記』・『神仙訣録』など、ほぼ 100 種類以上の道教と仏教関係の典籍が総合的に網羅されて引用されており、読者の耳目を圧倒する。大體このような記録の存在は、『東國名山洞天注解記』以前から福地洞天を追い求める意識が持続的に存在し、當時の知識人の道書の讀書の範囲が今日の我々の一般的な予想をはるかに上回る廣範囲なものであったことを明確に確認させるものである。このような資料に現れた福地洞天に関する認識については、稿を改めて深い検討が必要な部分であるため後考に譲ることとし、ここではその中の一つの段落だけを紹介してみることにする。

これから 81 福地を訪れ 36 洞を求めて無生の境に入って不死の庭に登り、膠陽館に住んで藥珠宮に横になり、春には朝霞を食べ、夏には沆瀣を食べ、松と栢を食べ、靈芝と朮草を食べ、胡麻でご飯を作って食べて高麗人蔘をゆでて食べ、雲牙を歯磨きして玉池を飲み、丹竈を磨いて黄金を鍛錬し、青囊銘を開いて『黃庭經』を唱え、紫庭の『眞誥』を読んで碧篆の文字を調べる。すなわち『中皇經』で、「元和を食べて五穀を断てば、必ず廖天に参画して眞訣を得る」という。白い鹿と青い牛に乗り、羽人と金衣鶴を招き、太上玉宸君に會うのは、すなわち『神仙訣録』において「天仙と地仙があるが、地仙が功行を多く積むと、ついに天仙に上ることになる」と記されている²¹。

全體 49 頁に達する膨大な山水遊記の全編が、このような方式の道家の文字で埋め盡くされており、一見すると一編の山水遊記というよりは、道家の秘訣書を一堂に集めたかのように見えるほどだ。ここにも既に 81 福地と 36 洞天の話が現れている。

ここで、當時の道教文化の主體化の努力と関連して紹介しなければならないもう一つの資料がある。南師古の『東國分野記』という本がそれだ。南師古は

宣祖代の術師で、彼はかつて戦争や天災地變が起きても安心して暮らせるという十勝地を定めて「南師古山水十勝保吉之地」を説いた『南師古秘訣』を作った人物でもある²²。南師古は最近でも、1960 年代以降に作られた『格菴遺録』という偽書の著者と指摘され、預言者として高名である。『東國分野記』も、いまだ學界にはまったく知られていない資料であるが、これは分野説に基づいて韓國の各地域を星座の位置に換算して比定した本である。

この本は徐有本（1762-1799）の『左蘇山人集』に収録される「與金生泳書」に、その名が初めて見える。該当する部分だけ示すと次の如くである。

『東國分野記』は約束どおり寫して送ってください。世の中に伝えられるところでは、これは南師古の作といます。およそ分野の主張は『周禮』に載っていますが、『星經』がすでに無くなってみると、今になって根據になるのは班固の『漢志』と鄭康成の『禮註』及び魏太史令陳卓が作った『郡國所直宿度』に過ぎません。しかし後世の儒者の中、信じる者と疑う者は半々です。しかしわが國に至っては土地が中國の地境と互いに接しているため併せて箕尾の分野に屬します。さらに、韓國の豆粒ほどの土地を分けて 28 宿に分け、どの村はどの星座に該当し、どの村はどの星座に該当する、というならば、これは本當に井の中の蛙が空を覗くことになるといえます。その主張はまるで虚空を穿着していないものを作り上げるようなものかと疑われ、實用に置いて使うことはできそうにありません。

しかし、地球という一つの點は、天體の大きな周りの眞ん中にあり、ただ大きな池にある小さな穴に過ぎないだけです。中國で星座により分野を分けるのは、それぞれの人の目が見る方向と向かうことを大まかに分けて所屬させたに過ぎません。例えば揚州は星紀に屬し、雍州は鶉首に屬するといいますが、どうして星紀の順番が揚州に臨んで終わり、鶉首の順番はただ雍州のみに屬するのでしょうか。本當にそうならば、全ての天、360 度で中國の 12 州をすべて盡くすことになるのだから、海外の萬國は同時に大きな宇宙に参加することはなくなるはずですが、これが理に適しているといえましょうか。

その理由から、中國から見る時は中國の分野があるということであり、東國から見る時は同様に東國の分野があるということになるので、それぞれにその方位の境界によって、それぞれがその災祥休咎を占うことも、やはりその理を欺くことはできないものといえるでしょう。南師古の災祥占は一度も外れたことがないため、世間ではわが國の邵康節と呼んでいます。その術法は専ら星座の形から推測するので、星座の分野を記録した『東國分野記』というものは、必ず自然の法象がそろっており、決して自分勝手に荒唐無稽な言葉を作ったのではないと思います。しかし、『東國分野記』

仙積累功行、遂昇天仙'者。

注 22…許筠も『惺翁識小録』下（惺所覆韻藻Ⅲ卷、184 頁）で、南師古の術法と予言に関する逸話を傳えている。

注 23…徐有本「與金生泳書」(『左蘇山人文集』卷 3, 章 40):東國分野記、依約臆去。世傳此是南師古所作。夫分野之說、載在周禮、而星經既亡、今所據者、止班固漢志。鄭康成禮註、及魏太史令陳卓所著郡國所直宿度。然後儒疑信者相半。而至於東國、則地與燕境相接、故併屬之箕尾分。今又就東土彈丸之地、割裂分繫於二十八宿、曰某州直某宿、某邑當某宿、是眞井蛙之窺天也、其說疑若鑿空杜撰、不可措諸實用。然地球一點、在天界大圖中、不翅鼻空之於大澤。中國星野之分、各以其人目所見方位、所向大概、分屬而已。如揚州屬星紀、雍州屬鶡首、豈星紀之次、止踰於揚、鶡首之次、獨配於雍也?苟如是則周天三百六十度、盡於中國十二州、而海外萬國並無與於大圖之天界也、此豈理也哉?故自中國而視之、則有中國之分野、自東國而視之、則亦有東國之分野、各隨其方位界限、而各占其災祥休咎、亦其理之不可誣者也。南師古災祥之占、百不一爽、世稱我東之康節。而其術專以星象推測、則所著星野之記、必有自然之法象、而決非臆撰無稽之言也。然記不分各州所直宿度、必是闕文也。尊於暇日、試檢輿圖、以一度二百里爲據、如湖南十二邑、皆屬角宿、則全州等邑得幾度、潭陽等邑得幾度、逐一分書於各州之下、以究前人未卒之業、則亦一事也。幸留意圖之。

注 24…金泳に關する事實は筆者の「天文學者金泳物

には各郡に該當する星座の度数が分かれていないので、おそらく文章が抜けているのではないかと思います。あなたが暇な日に輿圖を試しに點檢して 1 度を 200 里と基準し、例えば湖南の 12 の郡をすべて角宿に所屬させたら、全州などの郡は何度になり潭陽などの郡は何度になるかを求められるので一つ一つ分けてそれぞれの郡の下に書いて、前人が終えられなかった作業を探せばこれもまた一つの事業でしょう。心掛けてこれを圖ってくれば幸いです^{*23}。

この手紙を送られた金泳とは、正祖代の天才的な天文學者で、幾何學に造詣が深く、『中星記』をはじめとし、『易象啓蒙』・『道教全議』など、數多くの天文學と易學及び道教關係の著述を残した人物である^{*24}。上記の手紙にある分野説とは古代の占星術から出た概念だ。古代人は天象の變化が地上に、ある事件を起こしたり、逆に地上のある事件が天上の星座に反映されると信じていたが、天上の星座の位置にしたがって地上の地域を分けて、その星座の變化が即ちその地域で發生する、ある變化の予徴になると考えた古代信仰の一つである^{*25}。

徐有本の手紙の内容を要約すればこうだ。中國の分野だけに従えば、わが國は東北方に置かれており、箕尾の分野に屬することになるが、星座の方向とはどこを中心に見るかによって分野が變わってくるので、中國には中國の分野があり、我が國には我が國の分野がなければならないのは當然のことである。南師古が作ったと傳えられる『東國分野記』はそのような點から見るととても意味深い本だが、この本には各郡に當たる星座の度数が正確に分かれていないので、君の該博な天文學の知識を動員して、輿圖を點檢し 1 度を 200 里と基準にして各郡別にその分野を正確に表示する作業を引き受けてみたらどうかというものだった。

言い換えれば、この『東國分野記』は性格が違うだけで、その意識面では『東國名山洞天注解記』とほぼ同じ軌道上に置かれる著作である。その著述時期もこの二つの間でさほど違いはないと見られる。これらはどちらも主體的な文化力量の向上による自己化の欲求を反映している。またこの『東國分野記』は、一般的に識緯書や預言書の機能に比重が置かれていたものと上記の手紙は暗示していることから、道教の星宿信仰的要素を確認することができる。實際に北宋の道士・李思聰が、『道藏』に収録された彼の『洞淵集』で 36 洞天を説明しながら洞天の位置説明に分野説を挿入していることは、そのような關連を確認させる良い例だといえる^{*26}。

以上見てきた様々な事實を総合すると、『東國名山洞天注解記』は、本來の許筠の撰述意圖とは關係なく、韓國の道教文化史において特別な意味を持つ著作であることは明らかである。そしてその土臺には、ある天才的な文人の才氣

溢れる想像力だけではなく、前代から累積された道教の文化體驗から來る底力があつたことを記憶しなければならない。

V. おわりに

宣祖(1567-1608)・光海(1608-1623)年間は壬辰倭亂の戦争體驗で地に落ちた民族意識の主體的な覺醒が高潮した時期である。また、前の時代から持續的に傳承されてきた修練道教が文化の正面に突出する中で、道教文化に対する一般の認識が高まり、これに伴い多様な著作が活發に作られた。このような中、本稿において今まで全く知られていなかった『東國名山洞天注解記』や『東國分野記』のような本の存在を確認し、その内容と體裁、そして道教文化史の意味を検討したことは、この時期に活性化した道教の主體的な文化の力量を推し量る一つの物差しになり得るといふ點から、少なからざる意味を持つであろう。

『東國名山洞天注解記』に見られるこのような洞天福地についての意識は、朝鮮後期に至ると『鄭鑑錄』の「三韓山林秘記」や十勝之地説に見られるような予言書的性格に變わりながら、東學や最近の新興宗教においても後天開關信仰と關連付けられた傳承として繼續している。これらを含め、前後の時期に様々な文獻に傳わる洞天福地と關連した仙境求尋、または仙境遊歷の説話を集中的に分析し、洞天福地説の東傳の様相と、そこに現れた心理の起底を推し量ることは今後の作業として残る。こうした議論の反復と深化とを通じて、韓國道教文化史の巨視的展望が樹立されることを希望する。

語』『新東亞』99 年 2 月号、550-556 頁で紹介している。

注 25…陳遵嬌『中國天文學史』第 2 卷、星象編(臺灣:明文書局、1985) 177-184 頁參照

注 26…例えば、「第三十六天金華山、高一千丈、洞周廻五百里。名金華洞元之天。即黃初平真人、遇赤松子、叱石爲羊、得道處。在婺州金華縣、上應婺女星故曰金華山。」のように、まず第 36 洞天である金華山の境界を説明し、これと關連した先人の事蹟を付け加えた後、天上の星座と對應させる方式で記述している。

洞天福地研究（どうてんふくちけんきゅう）第11号

ISSN 2186-182X

発行日：2023年3月22日

編集：専修大学土屋昌明研究室内 洞天福地研究編集委員会

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区三田 2-1-1

専修大学 9603 the0561@isc.senshu-u.ac.jp

制作：古賀弘幸

発行人：尾方敏裕

発行所：株式会社好文出版

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 540 林ビル 3F

TEL03-5273-2739 FAX03-5273-2740

<http://www.kohbun.co.jp/>